

「最善の音韻論的解釈は一つしかない」という作業仮説について

服部四郎

本誌第32輯の巻頭の論文として、亀井孝さんが「『最善の音韻論的解釈は一つしかない』という作業仮説に対して」という一文を発表して、私見に対する「評論」（7頁17行による）を寄せられた。この題目を見た時に、この文章は私見に対する批評かなとは感じたのだが、永い間一読する機会がなかった。幸いこの春、それを一読するを得て、私見が誤解されているのを知り、お答えを執筆するのが適当だと考えるに至った。

まず亀井さんは、私が雑誌『国語研究』第3号所載の亀井さんの文章を、自説に対する「亀井さんの批評」と受取ったことを気にしておられるかのようで、それに関連してかなり長く書いておられるが、それによって、「批評」という単語の語感が、亀井さんと私とで多少異なることが私に明かとなった。私は、公正適切な批評は学界に対して有益なばかりでなく、被批評者にとっても有難いものであると考える。また、誤解を含んでおったにしても、まじめな批評は、どういふ点が誤解されるかということが明かになるので、やはり有益であると思う。だから私は、「亀井さんの

批評」を受けてむしろ嬉しく思っていたくらいで、その点は御放心いいただきたい。尤も、見当違いの批評——それは真の意味での「批評」とは言い難いが——の中には、ほとんど誤解をひろめるのに役立つに過ぎないようなものもあるので、そういうものは厄介だなあと感ずるようにはなりつつあるが、それらとても、口から口へと伝わるよりは、文字にして公表される方が良いと思う。

さて、亀井さんが本誌第32輯所載の文章でスポットライトを当てられたのは、拙文「音韻論（二）」（本誌第26輯所載）の註22の次の一文である。

私の意見では、「音韻論的解釈は単一ではあり得ない」という作業仮説よりも、「最善の音韻論的解釈は一つしかない」という作業仮説の方が、実践的に有利であると思う。

その意味は、たとえば、英語の *h* と *ng* とは補い合う分布を示すが、両者を同一の音素に属すると見ようと、別の音素に属すると見ようと、それは *matter of taste* だ、というような態度で居ると、探求はそこで止るが、こういう意見の対立があった場合に、どち

らかが（「その言語の音韻構造を明かにするために」〔拙文56頁〕）ヨリ良い解釈なのではないか、或いは両者の対立を揚棄するような第三の解釈があるのでないか、と始終考えるようにしている。探求が停止することなく、研究が有利に展開する、というところを私は経験して来た、というのである。最後の「……と思う」は、英語で言えば For me……ということになる。

亀井さんはまず、「最善の……は一つしかない」という表現をとりえて、

最善のものが二つあったら、それこそ、をかしい。すなわち、そのいづれかは、すくなくとも、最善のものにはなりえない。その意味では、解釈の多途に対して、最善の解釈は一つしかないといってみたとこで、それは、作業仮説としては、意義がない。（7頁）

と書いておられる。「最善」という単語の意味に「唯一の」という意味を含ませることにすれば、「最善のものが一つしかない」という表現はたしかにおかしい。私があのような表現をしたときの心理過程を想起分析して見ると、one of the best……s という英語の表現が背景に浮んでいたようである。即ち「最善のもの」が複数であり得るといふような漠然とした考えがあった。一方、「最善の音韻論的解釈がある」というだけでは何だかものたりないので、強調的に「最善の音韻論的解釈が一つあり、且つ一つしかない」とでも言いたいような気持もあり、それもくどいようなので、ああいう表現になったように思う。蔽密に言えば、ただ「最善の音韻論的解釈がある」というべきであろうが、この表現の不

備から、私が表現しようとした思想が無意味であると断ずることができないのは明白である。

亀井さんは、更に言葉が続けて次のように言われる。

しかも、反面、現実においては、「最善の音韻論的解釈は一つしかない」といふ命題は、わるくすると、個人の小さい主観を肯定することになる。ひとは——たれもがつねにとはいはぬが——一往、ある瞬間には、自分の解釈を——それ以上の解釈が考へられないといふ意味で——最善と信ぜざるをえないでもあらうから。（7頁）

ここでも、亀井さんは、私とは違った思想を持って居られることが明かとなった。私の考えでは、「最善の音韻論的解釈」とは我々の常に探求して止まないものであるが、我々がそれに達し得たという保証は、いつの場合にも無い。だからこそ私は批評を歓迎するのである。何かの反対意見があれば、自説を検討するのに有利な手がかりが獲られるわけで、更に真理に近づき得る望みがヨリ大きくなる。西洋人は、「私の知る範囲では、こうこうだ」と言う習慣があるのでゆとりがあるが、我々日本人は、ただ「こうこうだ」と断言してつて動きがとれなくなることがよくある。右に引用した亀井さんの一文は、日本人のそういう傾向をよく表現しているように思う。真理追求の作業を停止することがないようになるといふ意味での作業仮説も、亀井さんによると、「わるくすると、個人の小さい主観を肯定することになる」と評価されるに至るのである。

かくして、亀井さんは次のように結論される。

そして、かゝる主観を克服すべき客観的規準は、——いま、うへに述べたやうに——かの命題には内在しないのである。このやうにみてるならば、どのみち、かの命題は、方法論的なものぞましさを一向にそなへてゐないといふべきである。といふことは、それは、——くりかへしていふが、——すくなくとも、音韻論の作業仮説としては無意義であるといふことである。

ところが、そのような客観的規準を私が探求しようと努力していることは、拙文「音韻論」(二)を読まれた人には明白であろう。私が色々の「作業原則」として挙げておいたのがそれである。

(勿論、私は、それらの原則を色々な場合に適用して、その適不適を検討すべきだと考えている。) しかるに、亀井さんは、拙文の右に引用した部分——というよりは問題の命題のみを見て、拙文全体を見られなかったかのような印象を受ける。樹を見て林を見ざるの類と言えようか。

かくして、私が有用であると考え、従つて他の人にも有用であり得ると考へる作業仮説を、亀井さんは「無意義である」と断じておられるのだが、このような意見の相違の生ずる大きい原因は、単に言葉の解釈、論文の読み方、にあるのではなく、亀井さんと私の、学問に対するデイスポジションの大きい違いにあるように思う。従つて、ちよつとやそつとの話し合ひで互に接近し得るものとは考へないが、この機会をとらえて私見を敷衍して説明しておくことは、広い目で見ても無意義ではないばかりでなく、学界に対する義務でもあると考へたので、一文を公にすることと

した。

附 記

念のため附言するが、学問は芸術とは違ふから、「どちらも一理あるように感ずる」というような印象批評は不可であると思う。どこがどうだからどうだと、はつきり言うのでなければ学問的批評とは言えない。

また、何らの理由も示さずに、ただ断定的な言葉を使って断定しても無益である。しかるに、そのような、何の理由も示されていない断定が、**権威者**によつてなされたとか、多くの人の意見だとかいうだけで、やすやすと受入れられるのを見掛けることがときどきある。そういう態度が不可であることは、——言うまでもないことながら——地動説が唱えられた初には、天動説が**権威者**や大衆の思想であつたことを思えば、明かである。わが国における**批評**ならびにそれに対する反応については、多くのことを述べたいと思うが、ここでは念のため、右の点だけを記しておく。

(昭和三十四年四月三日)

——東京大学教授——